



天明七 (二世宗瑞遺稿)

俳諧  
牛之友

全



猗猗彼綠竹

君子長為友

源羨德書



は年を末までしなりと鏡裏庵の  
閑窓を敲き永く談笑の交をむすひ  
ひらあらし蕉翁の流を志すよまは  
おの志は深き子めくおひて二世  
宗瑞居士の尺牘數章百ありしは  
草稿おとせむとあられのつと武江  
あ房をしよと分て後ち常と  
懐みし額下は珠のたゞひる影

ちうハあれといふも我のこころ  
るあらしあいのま口惜きと  
しあふもいかけ山溪よせしむを  
追て遥平大都會のたまをふを想  
像し頻りにちあは詞友の志し  
きもつら鏡裏庵の書通と  
諸君の玉色をばお宇松梅雪の外  
も遠きを典め句を携りてあれを合を

一冊子とあり一冊にわきをきりて板子  
のすまら金石を壁の送を同うするよ  
似せれと風流ハそそ幾りしちあふん  
句の巧拙ヲ拍し波をなんげおそ  
懸しそ舟の支とす冊おけしめに  
せせれハ右さいえれ宗瑞居士法信の  
中よて一ひし三ひしのものなむと  
爰にありて同志の人しし

告るよとていふよよいより予り東短す  
らまよとていふれハ兎角龜もの迷眼  
よのよいさしりキルをほおるふいめん  
えん人みそれ何あまのしとするそと  
あはのらよの獨武者瑞石毫我  
鏡湖庵カ名東牖と採乾

天明七未五春

白兔園二世宗瑞居士遺稿

一人有り柙門を叩て入年若く丈低き法師あり  
身平一氣也如素服を著同一父の道服改ま  
況強の思望をいへば子に尺牘の尾を捨て云  
余を誹謗を以生涯の縁と守まことや當世の  
急取ま委く江戸百有餘人の宗匠の肺肝を  
探り知る十五世教の言志を信憑証は勝利  
堂を指すところ今つらう君、能風平

志何を討て独吟の一歩を推し傳ふ爪染  
爪情のそくへ付くと付るとの扱の添削を  
ゆらん其後ほきと如義あり永く蕉門の  
奴とあかんしそよきをんれい

世の中絆

金屏の松をたひやみあり

鳴

淋しいとよ鳴をりひけす

酒

酒の炯るぬの罪をおとらふ

女

こゝろにこそおと魔の物

こや海

腰元お血をくせぬるやうに

金

仙基河原ぞ一金の花咲

髪

羊越の髪にひらりと流浴衣

夜食

夜食は海むと牛の用心

庵

市中庵月けりておぼしき人

雫

簑とよきそゆる雨をぬく

隅川

都鳥尾の舟にぬ舟りり

晩鐘

汁の施主も居り入お

月花

月花をのつゝやたよ而は

干鰯

おしと干鰯と妻の飯お

須戸

よの夜赤い髪は須戸の浦

神 白羽く立ちくひうへる物入

松丸 桐の木も琴もきこまらぬ物

庭の石 庭の石のわらわを土とて思ふ

金魚 文盲な吐く居る入梅のまに

差支 きしを喰ぬ國のも命

糠味噌 葉せうらい糠味噌柿の根の葉草

担里 山にありて子を捨る藪

図画 振付る我圖画子物ぞを了

牛若 千人切平外科の古道入

月 夕月を思ふ力とちなりぬ

箱 といふ何所かしこ箱のふり付

入函 鹿の色入函の糸入書り

料理 心の腹く吸物の望箱カ

樽 菰のふり墨をまきまきぬれ

乞食 乞食も今よ生の松原

花 花の山をのぼるはほいぬ

カ

六



鶯 子秋万葉叶うらみす

柳門の云可なり自ら他門のよみ趣向中  
美別あり一は句作もて流るるも又と  
表を筆句とすはと我にまほし

金糸子松の在ひや久し龍

隠家 落葉隠れ宿は何果 常瑞

客 都氣ハ幸味子果をほりて

風 小菊四ふ枝風なとる

月 川舟子連立月まきし下

鴨 さくらりの鴨もあは淋し

紅葉 焚やうなれ紫は酒を冷てむ

女 女はうりのたん一抱し

こや床 風もあひく人のあつちを床

金 清江戸ハ金を陽とも思ぬ

師走 昔そこの年をふめそ舟の雪

夜食 月ハお合はる粥も焼味

庵 先生の札ハ唐の至やハ  
 霄 乃んをそそ我を折きたん  
 偶雷 菱笠も一羽堤のこやこ  
 晚鐘 是ーあー此とれも入相  
 月花 月花千一尺株雲の懐  
 干轄 干轄子狼の法あま  
 須广 幸海芸中あも位ハ須  
 神 穢治事とと通釈の神勅

松凡 百本の音もあま松のり  
 庭籠 庭籠の綱を付る  
 又喧ハ殿も念念の入  
 身 此ーと四まそ鬼の酒  
 糖味 分別ハ糖味糖桶の至所  
 推里 楊屋も路次千ハ  
 國西 國西ハ障子一重  
 牛舌 牛舌も飯も是ま  
 行支

月 夕月、夕月とておぼしむるを  
 箱 斤側町の箱はつぎ  
 入園 浪人の入園、秋の風流  
 料理 け、朝暮の和國一流  
 櫛 鑿に如、扇を問ひ、籠の音  
 乞食 待と乞食、又いぬる音  
 花 二本の花をあらう、花種とて  
 学 古菓学、冷世に比、寄

又一人あるを、年々天命を知らる、く、華髪干  
 して朱鞘の両刀を横へ入て、不侍、京家  
 者、帝又連、可より、宗祇、宗長の、直言  
 を傳ふ、今ハ俳諧甚早、俗み、て世ある  
 地ハ、神とあり、衣可、歎和、おの、一、好ある、を  
 討と、一、美を、つ、れ、号、て、連、お、俳、諧、を  
 君、江東、蕉門、四大家、の、竹、流、と、呼、び、望、早、に  
 芥、を、加、へ、雅、俗、の、さ、ら、ひ、を、ふ、ら、ひ、へ、柳、門

かきよびてて候子より一ちのれも雅言の  
ぬめりハ蕉門のいまぬめり則加筆云

連哥一能諧

本文 加筆  
まじりて一夜を短く星の今をみる

第一骨を折る延れ月  
はあめよこのめ尻尾のぬもせ

湯土り髪をぬく杖をさるりて  
湯土り眉をぬく霜をぬく

かびくををぼく餅の友  
るるるぬ甲おむりかきい

埋めをわのりまを待待形  
月代を刺して炭家のまを待

更行鐘平一風をきき方  
本も席の時分何所の於陸

端は持こくぬけ旅まつ  
持つけぬ小判四を牧旅そ喜

猶糸舟おきしるぬめり  
かす市あれは心良候を酔ふ

蓮の葉と又まうあ沈は赤財天  
蓮咲く池に浮葉あはまらし

あつらふ少く花火ていあ  
螢を花とちりす涼風

回樂をまへまこととせむを振り  
盃を取るの道とていさひを

京の女を籠りりり  
都の人や恵れぬ夜

地下あつらふをなまらし  
お島の道とていさひを

骨を痛く大田道権  
はあまの表とわり衣せん

け下又つん

附録

丸内儀八人並はげく八重松 <sup>二世</sup> 宗瑞

或難云内儀いふや其角の氣内やよと  
谷内儀八人並はげく八重松  
志う八重松とていさひを  
や可思

五又字も冠あれハ中々也ハ箱の電氣  
 産頭りのもあふ又字もあいらく其角、  
 ハきんやハ早キとも思ふあ〜ハ賞款の  
 早キともあいらく孫きんよハ知れぬ  
 早キともあいらく〜ハ鼻も肉あも  
 奥の縁も后も尊早ハ句よあ〜  
 妹もハ梳ハ相もあ〜悟〜ハ〜ハ海

春興

梅柳

梅又せし龍と化せん舟の杖 不門  
 むめうやゆ〜巨燵の碎返し 扇車  
 旅以宮姑妻戸明り梅の花 房州 買風  
 梅咲もさあも都の白ひらふ 車鄰  
 舟はつらも船や梅の花枝 仙路  
 立もそ又れハまたり梅の月 大瑞

梅や六浦の板を枕も

橋子

干涸もさするなりけし梅の花

屑成

ゆき戸を旭ほるや梅の影

庭魚

きり水の根や涌き梅の葉

範路

まを志ぬ杭枝も何むあり心

東園

梅咲や雪のころよ暮る

何言

梅柳先をこゝ文字女文字

梅人

陽あいの翦つともきつる柳

宗瑞

伸る松梢のひびく柳も

武目黒 雲步

去梅子白馬は奢は夕外

房利 杏林

鮎籠くむ舟もかき柳は

武籠 子亭

夷舟の梢を潜は柳うな

秋 連射

雨二日柳ささめく時を

筑波庵 魯洲

ゆきり柳つらねる花を

翠兒

去梅や土を去ると只二寸

房六 文嶺

すこに引裂く花は柳うな

招月

廿五

上

を糸のおすひあけきき柳川 冬鯉  
 二三尺柳又まむ流れりな 九夏  
 雨より一はねを麻を交柳川 何虹  
 十喜柳や雪より雨の父の心 東船  
 鷹の目れすりふや糸柳 柳巷  
 指をれハ五ん助とく柳うな 桃舎  
 梅のの葉内ちろや居村道 如拙

鶯 雉子  
 乙鳥 蛙

鶯や苗枚原地弁交り 守静  
 ころみすの南谷七しを言ひ 其定  
 字らみまや朝日枝をほし言 良馬  
 鶯やよきはなされ枯棹 素汐  
 鶯や下るはちちる言は教 千里  
 ころみすや椽先ちる交短つら 吏雪  
 鶯や下起りふまきり二度とら 梅扇  
 あそと交雉子のあき川を流 如流



しるやえ逵一へ行瘦世帯 柳明

床返りのよみおとなりて初蛙 船賀

子の日小松曳 七種 若菜

まき丹より一ちふ良ハ葎ハ茶粥外 宗宇

君くゝの起しよゝゝやまそふ成 百羅

小松菜を引けや子の日おの葛西 布翠

そめそふち賣ハ瀬大原くゝ棲りけ 梅居

若菜理子田鶴啼たはふり糸 山孤

小松引移ぬ冠と突く日りカ小 花容

睡子巢を去て拵ふ日や若菜摘 染糸

まき海平なるはのや若菜舟 壽石

魚子飽く奮り日比や破葉はを 露休

若菜野や外めりふ女 都人 花徑

七種や唐土ハ一のゆるぬち 旅雁

霞 几中

鷹の目平小鳥をこほす霞外 一頁

竹友

十五

誰の夜の死に残り残るその夜 分流

洛外へ都はうつくさあり 風葉

立ちあそび瑠璃殿 君魚

をりし 房丸叔 魂あり 虎溪 几巾

大男我り 浪花 拵ひ 竹阿 ぬいりのけり

まき月 白魚 まの夜

鐘露 柳門

川明 瑞雨

灯 仙露

岸 雪碇

保輔 完未

まの夜 雪葉

まの夜 重厚

揺 路花

白魚 梅栗

まき雨 決雪 まき霜 柳寒

一乃名残るもむ夜ありおのむ 百州  
山の猿より尾や花の雨 免濤  
とりかへては雪まらぬ湯舟は 神奈川 豊碕  
暁も覚がしき一花の三相 秋杵  
歯こころのさしこゆる寒は 馬水

春日 雪解 長閑

こまよこもれぬ元弦は 山花  
松の根中 嬰児眠りおそり 神奈川 槐道

いつはるも山より雪解は 三鏡  
雪解や松風通ふ龍の糸 樟中  
長閑さや宿まらぬおのりも 桂州

雑春

あそのゆきはあうけく白尾くま 房州 梅礎  
海れては海苔のまきりおのり 房州 兎十  
春のわかき橋ののり 房州 朋来  
龍宮らまや散ゆは梅海苔 蒼谷

花の影を招き返しつ枯唐 三駟  
福引や三輪の社に鏡餅 房別 濤月  
日何よりよまを更けり落の巻 祇鶴  
猿曳の綱をゆるむ日柿外 甲身延 魚藻  
猫の恋こりれ死を哀なり 大蛙  
思ふ行も啼て跡所 猫の毛 砂月  
草もちや老婢埒切 なせり 藜太

十巻 風

花風や物の香白く何より餅 石漱  
添まきもて来て風ぬまの風 房別 宇松  
袖郎きうん中もこれ 吐英  
花風や汗の志より所納石 井星  
水口の帯をよどり 房別 和翠  
花風や舟をよどり 瑞石  
大尾  
鏡裏庵  
動くも竹の葉やまの雨 梅年

追加

秋よりとまき頭を香なり秋月 素丸

房よりハ苞子多き厨やぬ菜賣 新し

喜風ヤ牛一動しとを一羽 房前 月叟

明栴此裏は散なり梅の美 武川和 鬼道

海の草は少溜そ又秋も静さに 忍 中松

高解やえり問は一漱二漱ぬえ 甲福銅寺 鬼一

丸くと廿日抱んと園子 甲福銅寺 百菜

うらひあや難流り忌火は籠の音 曲肱

夢工す 栞 えの志なわん音は 茂楓

ひま帆は文川より 武上青木 李庭

二ッ居く時とをめは難まの事 武上青木 呂仙

日あかりに小魚浮りり妻の水 廣 卜水

あそ海子舟と抱く柳の籠 武稀毛 秋河

あそく 武稀毛 富士ともてまは 花城

根よのえ形音の夢ゆ 結玉造 柗下 可雲

凍解や詠へ房れハ丸木橋 馬喬

あけ雪や白いとのとをわおる物ん 甲身延 古川

月の影は透くや笠海苔の花は葉 武雙谷 柳雨

この立山い川こーくもおる物ん 徳布

恵し得し尺牘の端は四時北吟 杖きりあり  
今まは車馬の白を捨おるまこりりん

近り急なる清き柳の雛 二世 宗瑞居士

あ草々〜 笠きさる言問よま

ら月も徳さけり物に 削 杖

セクまけやあ恵貸さんいのあり

猿引や柳口ッ言も三〇の月

夜言れ解るをこわり籠り

卯の卯ののふれ中より籠り

志し魚や柳の言し〜 籠り

笠すれと寄り交う〜 籠り

く川籠 中 紅裏の彩又え〜 籠り

たせ賣のこが〜 籠り

竹友

二十

魚肝油と子布油とや蘇の油

田家考

一月の子里れ約やすき返

七子改名の軸

瑞ひよき茶くの源より

彫工

江戸麻布龍土

上村芦川

